

東京大学工学系大学院授業・建築史学第5（2011）

記録することの可能性：震災と建築史（2）

2011年10月13日（木）16:20～19:30

東京大学生産技術研究所 食堂棟2階R-5



テキスト読解（葛西慎平）

シンポジウム「東日本大震災の記録とその活用」報告（田口純子）

講義「循環と蓄積～三陸漁村の津波と再生のアーカイブより」（青井哲人先生）

葛西：テキスト読解

配布資料 伊東忠太『木片集』

「恐るべき点の威力」「帝都復興」「日本建築の発展と地震」「帝都復興と橋」

『伊東忠太著作集6 論叢・随筆・漫筆』

「バラックの美」「大正十二年大震災火の東京へ」「震災所感」

関野貞 『建築史上より見たる古社寺の災害』論説・建築雑誌451号

『関野貞日記』

「東京地震建物被害調査記録」「省内地震建物被害調査記録」

西和夫 『建築史研究の新視点2』

質疑

村松 全体の感想？

葛西 全体の論調として現代にも通じるところがあり面白い。

島 木片集について…

1. 大槌で集落移転・既存集落の工業用地への転用が提案されているが、木片集においても下町の公園その他への転用が提案されている点で共通している。しかしそうしたハード面に頼り切った防災(防潮堤など含む)に対する是非の議論がなされていないことに、変わらない状況を感じる。
2. 神社などの文化財はコミュニティとの関係がその存在の前提としてあるので、そうしたものをただ文化財としてのみ扱うことには疑問を感じる。

村松 西和夫の論文はなぜ選んだのか。

岡村 特別に理由はなかったが、結果として文献等と照合し、実証的に研究を行っている点で面白かった。

田口 地形と集落・震災の関係という点への着目は中谷(前回)の講義とも通じる。

関野のスケッチに感心した。テキスト(手記等)の資料は残っていないのか。

岡村 調査時の関野は中村(達太郎)の手伝いでしかなかったもので、そういったものは無いのでは。

田口 スケッチは、写真よりも長い時間対象と向かい合っていることの証左であり、それ自体にひとつの価値を見出せる。

ドン 関野は欧・米の建築家・建築史家よりも地震に対する興味が強い。日本の建築には多彩な専門化が集まっておりそれが特色であると思う。

村松 ミルン・コンドル等による地震の重視が影響している。

ドン 明治初期には地震学という分野がなく、日本において発展したものである。米・伊などは地震が多いが…本来 architect と engineer が独立した存在であり、地震は engineer の専門という認識がある。

村松 阪神では一般のボランティアによる支援が話題になったが、今回はよりアカデミックな関与(アカデミック・ボランティア?)も多い。あらゆる分野が注目している。

ドン 米では近年大震災はないものの、カトリナの被害などは似たような面を持つ。治安の悪化・政府との conflict など、今回の日本とは大分状況を異にする。基本的に相互扶助という面は弱い。

田口 『災害ユートピア』を読んだ。被災地支援という動きは大なり小なりどこでも起こるものだが、問題はそれが持続しないことにある。

日本では政府との conflict などが顕在化しない文化がある。それが心配な面も。

村松 全体として、歴史家は今も昔もあまり役に立っていないと思う。伊東のようなトップダウンの提案。関野は緻密だが案としては面白味に欠ける。西は、建物のことばかりで人間への注目が薄い。現在の歴史化のリアクションというもこの3人のパリエーション程度に留まっているのではないかな。

岡村 伊東の言説には東大教授という立場も関わっているのではないかな。

興味深いのは日本の建築のノマド性に言及している点。都市の移動というのは青井の論点とも重なる。

- 自分はただ移動するのではなく、その中に不変の核というようなものも存在しているように思うが…
- 村松 建築進化論は震災以前に提唱されていたと思うが、それが震災によってどのような影響を受けたのかも気になる。
- チョウ 中国での唐山地震について…政府はそれまで地震と都市という問題に対して無関心だったことから、大きな被害が出た。またその被害に対する政府の隠蔽が行われた事実がある。
こうして大学で地震について考えることに意義を感じる。
日本ではみな、屋外避難をしようとしなのに驚いている。建物に対する信頼が要因か。
- 村松 唐山地震の後は木造建築物の耐震性についての研究が進んだ。
今回の地震でそういうことはありそうか。
- 岡村 津波が来たところでは木造建築物は全てさらわれてしまっている為、状況は厳しいと聞いている。

田口：シンポジウム「東日本大震災の記録とその活用」報告

「3. 11まるごとアーカイブス」

データを「集める」「活用する」「発信する」の3部構成。NPO・NGOが中心に作成。

「防災マルチプル電子図鑑」の提案(発信)

「記録」の価値について…吉見俊哉による要約

1. 記録そのものの価値…テキストとして
2. 「記録する」行為の価値…活動の広がり？
3. 記録を「活用する」ことの価値…さらに双方向メディアとしての機能？

これらを踏まえ、アーカイブにおける4つのポイントを考えなければならないと思う。

1. 何を記録するか、誰が記録するか 「素」の情報が意味を持つには客観性の獲得が重要
→誰が記録するか、という事が問題
2. 集めた情報をどう編集するか
3. メディア形式と、参加する主体
4. 記録のスパン 記録を行う頻度、さらにその記録がどれだけの射程を持つか、という点。「まるごと」では10年間の活動を予定しているようだが…

自己紹介

- 国枝 3月11日は内藤廣の講演会で本郷にいた。震災2ヵ月後に釜石・大船渡などを一度訪問した。
- 岸 新領域のサステナブル研究科から。既到大槌で、事業者などと連携しながら復興プランを発信するといような活動を行っている。3月11日は九段下にいた。

青井哲人先生講義：「循環と蓄積～三陸漁村の津波と再生のアーカイブより」

webpage について：

津波と再生の歴史のアーカイブを作成している。昭和三陸津波とその復興の記録を、集落単位で集めた。

4 月 11 日にプロジェクトを始動。

明治大学建築史建築論研究室「三陸海岸の集落 災害と再生:1896, 1933, 1960」

(<http://d.hatena.ne.jp/meiji-kenchikushi/>)

(参考)都市計画遺産研究会「三陸海岸都市の都市計画／復興計画史アーカイブ」

(<http://www45.atwiki.jp/sanrikuplanning/>)

都市発生学について：

モノの動的な仕組み「モノ×トキの組成」に着目

史学的実験…「事件」決定的な初期条件によって顕在化する都市の組織的性質を解明する。

生命を扱う本来の発生学との相違も…

・「土地」の恒久性・基盤性(生物の組織ではすべてが「流れ」のうちにある)

・水平な関係のみではない。権力構造が作用する(法制度・計画など)。

都市発生学の公開研究会について：

1. 田中傑 関東大震災後の復興プロセス:バラックから本建築へ
インフォーマルな技術(曳家)を組み込んだ都市計画
2. 初田香成 闇市＝都市論序説:都市建築史から見た東京の闇市
インフォーマルな組織(テキ屋)によるインキュベーション
3. 牧紀男 移動する人々:災害の住居誌
resilience の重要性
要素としての robustness, redundancy, resourcefulness, rapidity
戦後、そうした resilience が失われてきているのではないか。
「人の移動」が resilience に寄与している。
4. 中島直人 三陸の復興計画史からの展望
復興を都市の日常に取り込む為には。

↓

都市は学ぶ (City Learns)、都市計画もまた学ぶ (Planning Culture)

三陸集落の津波後の再生と、その後

地位昭夫『漁村計画と政策の沿革』…移転集落が 10 年足らずで高台から復帰してくることを指摘(竹内芳太郎)

津波を組み込んだ文化が存在する?→津波と再生の周期性

事例(田ノ浜) …集落移転と復元集落による二重化がプランから読み取れる。「三陸の異彩」

山口弥一郎『津波と村』

集落の津波に対する応答がテーマ

柳田國男の助言から聞き取り調査も合わせて行い、明治・昭和三陸についての詳細な読み取りが行われている

地形の重要性

被災地の地形区分によって被災の形式も類型化できる(例・沈降海岸の危険・沖積平地の都市化と壊滅等)

集落移動の3類型

明治では行政主導の集落移転はあまり機能しなかったが、昭和ではかなり広範に精力的な集落移転が行われた。

集落移動の形態 集団移動
 分散移動
 非移動

移動形態の決定要因: 規模、地形、産業構成、政策

復元の要因: 移転集落の機能不全、機会(好景気など)、誘引(主に既存部分への人口流入を契機とする)

津波の低頻度も問題…過去の経験を持つ人が居なくなった頃に再発する

ケーススタディ

A: 唐丹本郷

集団移転による雛壇状集落

新沼家のスケッチ…被災前、被害、バラックの様子を記録

B: 綾里港・岩崎

街村状移転集落

移転集落がひとつの東北の文化的基底をなす可能性→移転集落の保存ということも視野に入れるべきである

復興地の類型 雛壇型: 田浜
 街村型: 両石、小白浜、本郷(三陸町吉浜)

本郷(三陸町吉浜): 全く集落復元が見られない珍しい例…かなり強い集落全体の決断が行われた可能性

只越: 明治の復興地割が、上屋を流されながら残存している。

「重くなる漁村」

土木構造物のインパクト

桑浜、小白浜

防潮堤の圧倒的スケールとその崩壊

漁港整備(防波堤+護岸)により養殖を推進。漁業の農業化。

昭和の復興期の集団移動と規制が、戦中・戦後の混乱で有名無実化

60年代以降の防潮堤整備の集落へのインパクト

集落史をみるキー＝「民俗」から「土木」へ…「重くなる漁村」

都市の復興は、さらに困難。

質疑

- 田口 唐丹本郷などのバラックは誰が作ったものか？
- 青井 確証はないが、住民の手によるものだろう。補助などあった可能性はあるが。
- 田口 関東大震災における区画整理とバラックの関係はここにも見られるものか？行政がバラックを「建てさせる」という側面はあったのか。
- 青井 これについても確証はないが、むかしから災害があればバラックを建てるのは当たり前だろう。本郷では、明治の三陸津波のときにも自分たちで長屋立てバラックを建てている。仮設住宅が公共的な供給になってきた歴史は調べる必要あり。
- 田口 「漁村が重くなる」という傾向は今後も続くか？
- 青井 被災前のインフラの状態は復元されるのではないかと思う。対応は都市や拠点漁港が優先されるだろうから、小漁村については二～三十年といったタイムスパンでみないといけないかもしれないが。インフラによる漁村の変質については、産業構造の面でも非常に重要な面があり、戦後の人口増加についてはその点も踏まえた議論が必要。クリフォード・ギアツが「involution」という概念において語っているのは、焼畑と米作の差異。米作では労働力を投入すれば収穫をあげられるので、同じ耕地面積でも人口が増やせる。養殖＝漁村の農業化も、involution の議論としてみることができるかもしれない。
- 岡村 集落移転によって、もともとの集落の土地の所有などの問題はどのように処理されるのか？
- 青井 昭和では国と県が指導力を持ち、また集落内の有力者（支配階層）が移転に際して強力なイニシアチブを発揮した結果、スムーズに移転が行われた。しかし戦後の漁業権解放などで、漁村内の階層的な社会構造はかなり解体され、今日ではさらにフラットになっている。今回はそういう意味で、明治・昭和に比べて格段に移転が困難なのは確か。
- 篠本 昭和三陸後の集落移転で、移転地の造成が始まるまでに半年ほどの間があるのはなぜか。行政は何をしていたのか。
- 青井 昭和三陸では初めて国庫補助による災害復興が行われた。県で計画し、国が承認する。半年でそれをやったのだから早いとみるべきでしょう。
- 篠本 復興集落における建築物のプランニング・設計は誰が行ったのか
- 青井 家屋は地元の大工だと考えてよいのでは。行政が行ったのは宅地造成の段階までだろう。
- 葛西 吉浜ではほぼ完全に集落が移転しているが、それに伴って産業構造は変化したのか。
- 青井 調べていないが、変化は当然あっただろう。かなり全体的な農業へのシフトが行われたのではないかと
- 葛西 現在、唐桑で活動しているが、住民の意見はやはり「漁業抜きで生活を考えることは出来ない」というものが強い。昭和三陸の後、一時期は養蚕にシフトした事もあったが結局漁業に戻ったと聞いている。
- 青井 漁民は海から離れられない、というのはマスコミが流布させすぎており、日本人のノスタルジーに訴える側面がという意見（赤坂憲雄）もある。重要な観点は、財産と権利の保全、つまり船と魚場を監視することなのではないか。高台移転の難点はそこにあると思う
- 岸 防潮堤など、「重い漁村」への傾向に対し、どのように働きかけるつもりか？
- 青井 計画者に対して、情報を提供していくことは可能。
人口の減少からある程度の構造の変化はあるにしても、やはり都市の場合は防潮堤などは必要だといわざるを得ない。
小規模集落に関しては住民の腹の決め方次第だろう。それでもインフラ抜きで考えることは殆どありえないとは思うが。

村松 1. 史学は計画側に対して示唆を与えることがその役割であると思うが、果たして史学がそのような役割を担うような方法はあるのだろうか？
文化財保護というのは一つの方法ではあると思うが、それ以外には見出せないものだろうか。
2. 「都市は生き物」ということを言っている一方で、青井の注目は構造物を偏重しているように思う。他の要素は、水や風なども含め幾らでもあるのに。
そもそも「都市」は主語たりうるのか？
「都市は生き物」という主張は結局、比喻を出ていないと思う。最早比喻に留まっている段階ではないのでは？

青井 1. 明治、そして昭和の津波において漁村レベルでの集落レイアウトの再編パターン（復興地の立地選定から地割・家屋まで）はほぼ確立しており、地形に対してもかなり自然で合理的。これはそのまま雛形になるが、これまでほとんど知られていない。
過去の漁村と現在の漁村がどう違っているかを把握することは、復興を考えるにあたって必要不可欠。非合理的な判断がなされていれば批判することも重要。
中島直人さんは、都市を計画・デザインする立場から歴史を見ている。復興計画の遺産は先人のデザインへの意志であり、それを日常に埋め込むことの重要性を主張している。
都市計画史はいまや、都市計画のみを見ていた段階からかなり「地べた」にまで降りてきていて、既に都市史との境目はかなり曖昧になりつつあると認識している。

2. に関しては、僕は都市は生命であるというのは比喻ではないと思っているけど、もう遅いから飲みながら話しませんか。